

## 賢いはたらき方のススメ🕒

### ドン小西さん



ビジネスパーソンも個性=自己表現が重要だ。特に、第一印象を左右する服装への細かい気遣いなど、身だしなみから人物像が見えてくるという。とすればファッションを自己表現のためのツールとして使わない手はない。では、どうすればいいのか。政治家や著名人を鋭い洞察力でファッションチェックするドン小西さんに、ビジネスパーソンの「身だしなみ」に対する姿勢について伺った。

### 服装を見るだけで仕事への姿勢が読み取れる

— 昨今のビジネスパーソンは、身だしなみ、中でも服装に気を配っていると思います。小西さんからご覧になって、ビジネスの場ではどういったことに気が付いたらよいのでしょうか？

例えば、面接で「できそうな人」に見えるよう服装や髪型を作り込んだとしても、面接する側は等身大のその人を見抜こうとしているわけです。私はかつて100人規模の会社を経営していましたが、面接をする時は、服装に表れるその人の内面を見ていましたね。

— 内面が服装に表れるのですか。

仕事に取り組む姿勢や会社に対する思いなども、服装で分かるんです。汚職事件を起こした政治家も服装を見ると「ああ、やっぱり」と納得することがあります。証人喚問に呼ばれているのに、スーツの色が妙に明るかったり、ピークドラペルと言って、襟の尖った攻撃的な印象に見えるジャケットだったり…ファッションはその人の生き方そのものが表現されているのです。

普通のビジネスパーソンだって、給料をもらうために漫然と仕事をしている人は、スーツがヨレヨレでも平気ですね。逆に、仕事の場としては相応しくないトレンドの高級腕時計をしている人は、仕事の後の遊びに意識が向いているように見えてしまう。いざ一緒に仕事してみると、やはり第一印象のような一面を持っていることが多いですよ。

— 「ビジネスパーソンらしい格好」をしているつもりでも、細部から人物像が見えてくるということですか。

女性もそうです。服装はきちんとしていても、やたらとキラキラしたメイクだったりすると、仕事より自分を飾ることが優先なのかなと思ってしまいます。ファッションはその人の内面を映す鏡です。ファッションチェックをしていると楽しいですよ。見抜けちゃうから(笑)。

ファッションチェックといっても、ネクタイの色がどうか、シャツの形がどうか、アイテムそのものの良し悪しではなくて、服を選ぶ段階からその人の仕事に取り組む姿勢が表れる、そういう部分を見ているんです。男性は女性と違って、ビジネスシーンでの服装はほとんど応用が利きません。ジャケット、シャツ、ネクタイから成るスーツのVゾーンで勝負することになる。使えるアイテムは少ないけれども、よく観察するとVゾーンから着ている人のいろんなことが見えてきます。



## 賢いはたらき方のススメ ㊦

— 逆に言うと「こう見せたい」という演出にも使えるということですね。

そうです。ファッションは「自己表現するためのツール」です。でも「こう見せたい」という時に人の真似ではダメです。人に合うものが自分にも合うとは限りませんから。やはりそこは自分なりに工夫することが大切です。身だしなみのポイントは好感度と安心感。相手から「この人は自分の話を聞いてくれそう」と思ってもらうことが大事です。例えば、クライアントから受注を取り付けたいという場面であれば、臨機応変に対応してくれそうな雰囲気です。堅すぎない着こなしがよさそう、とかね。良くないのはだらしなく見えること。靴が汚れていたり、パンツの裾がヨレヨレだったり、そういう人は仕事でも雑な部分があります。

— 客観性が必要ということですね。他人から見たらどうだろう？ と一歩引いて自分を見してみる。

おしゃれな人は「人からどう見えるか」という結果と「自分はこう見られたい」という思いに誤差がないんです。主観的な目と客観的な目、両方を持ち合わせている人はセルフプロデュースが上手い。そこがずれていると、ダサく、なるんです。

## キャリアもファッションも「自分を知る」ことから始まる

— ファッションにおいて客観的な目を持っているということは、世の中の流れや周囲の状況を見ていることにもつながりそうですね。

そう。だからヨレヨレのパンツをはいている人というのは、自分が外からどう見られているか想像する力が欠けているとも言えます。そういう人は割と多いですよ。ファッションに限らず仕事においても繊細さに欠けるタイプです。

— 今は経営者も格好のよいスタイリッシュな方が増えたと思います。自分の見せ方、セルフプロデュースが大事だという考え方がだいぶ定着したのではないのでしょうか。

その通りだと思います。昔は出世のための方程式がみな同じだったし、ビジネスシーンでのファッションを自己表現と捉えることなどありませんでした。今は職種も業態も多様化して、その分ビジネスチャンスも自己表現の場も増えたわけです。当然、経営者のファッションも変わってくるでしょうね。

— ビジネスパーソンも「この組織にいれば安泰」という時代ではなくなり、自分でキャリア形成していくことが求められます。キャリアというのは手探りだと思うんです。働いているうちにいろんな成果を出せるようになり、自分はこういうことが向いていると分かるようになる。仕事ができる人というのは、早く自分を見つけた人なんです。出世するのも、成功するのも、ファッションも同じだと私は思います。まずは「自分を知る」ことですね。

— 自分に向いているもの、似合うもの、これだと思うものを見つけるには、経験を積むしかないのでしょうか？

そういうものだと思います。私だって未だに手探りです。誰かと同じ服を着るのが好きではないから、ファッションにおいては唯一無二でありたいと思っています。家でくつろぐ時も服装の細かいことが気になってしまう。着ているパジャマと靴下の色が合っていないと、それだけで落ち着かないんです。部屋着だからといって妥協ができない。仕事に対する姿勢とは、そういうことだと思っています。

— ビジネスシーンにおけるファッションというと、女性に比べて男性は圧倒的に選択肢が少なくなります。スーツにネクタイという枠の中で、どのような自己表現ができるのでしょうか？

以前、税関職員の制服をデザインしたことがあります。税関は外国との最初の窓口ですから、経済的に豊かで文化的な国というイメージを持ってもらえるデザインにしようと考えました。それまでの制服は軍服の延長のようで、かっちりしているけれども堅苦しく窮屈そうな印象でした。これではゆとりのある国には見えないと思い、制服の色をそれまでの「青」から「紫がかった深みのある青」に変えました。それだけで、和のテイストが加味され上品になります。シルエットは少しゆったりめにし、質問をしても丁寧に答えてくれそうな安心感のあるイメージに仕上げました。シーンとメッセージを明確にして、全体の空気感を作り出すことが大切なのです。

## 賢いはたらき方のススメ🕒

スーツでも同じです。そのためには、まず姿見が必要です。全身を鏡に映して客観的にチェックすることを習慣にするとよいと思います。男性が使えるアイテムは、スーツとシャツとネクタイしかないのだから、まずはその3つのバランスを考えることが重要なのです。シルエットのチェックができるようになるだけでも、服装の印象がだいぶ変わりますよ。袖が長過ぎるとか短過ぎるとか、この靴にこのパンツを合わせると裾幅が広すぎて不格好だとか、そういった全体のバランスに関心を持ってもらいたいですね。



— 空気感や全身のバランスを感じ取れるようになるには、他人の服装をよく見て目を養うことも必要ですね。

他人のチェックや批判は、皆さんよくなさるんですよ(笑)。そしてほとんど正しい。それが自分のこととなると、まるで分かっていないのは不思議ですね。

他人をチェックするのは悪いことではありません。でも相手の服装に好感を持ったら、「どこがそう感じさせるのだろう、自分とどこが違うのだろう」と比較するほうがずっと意味があります。それによってセンスが磨かれていくからです。「とりあえずスーツを着ていれば、誰にも怒られない」という怠惰な発想でビジネススーツを過信してはダメですよ。

ニューヨークのビジネスパーソンは、状況に応じて着こなしを変えています。クライアントに新しい提案をする日なら、自分に親しみを持ってもらえるよう、ノーネクタイでコットンシャツにチノパン。ですが、いざ契約という段になったら、清潔感、信頼感を押し出してきちんとスーツで決める。状況によって服装が違うんです。

— 自分の印象を服装でコントロールしているのですね。

スーツを着るにしても、そういう配慮はできます。特に男性はジャケット、シャツ、ネクタイの3つしかないのですから、基本的なルールは難しくありませんよ。細身で襟の狭いスーツならシャツの襟も小ぶりでネクタイも細いものを合わせるとか、太いネクタイを締めるなら合わせるシャツはワイドカラーというように使い分ける。今日の仕事の気分と服装のバランスがぴったりまとまった日は、発言も自信を持ってできそうな気がしてきませんか？ 気持ちに余裕が生まれると思いますよ。

## プロデュース力は仕事にも生き方にも通じるスキル

— 著名人で、自分をよく知っていて見せ方が上手だと思う人はいますか？

デーブ・スペクター氏はVゾーンの作り方が上手いですね。彼は、テレビが主な活躍の場ですから、胸から上がテレビにどう映るかに焦点を当ててモノを考えるのです。ですからネクタイはヴェルサーチやデュシャンといったブランドものを何十本とまとめ買いするそうです。その代わり足元はスニーカーだったり、パンツの裾が中途半端な長さだったりする。「足元はテレビに映らないから」と一向に気にしません(笑)。さすがに合理的で、プロデュースというものをよく分かっていると思いました。

最近は政治家も格好よく自己表現が上手い人が増えました。若々しく見せる工夫もしているし、安倍首相も海外へ行く時は普段はあまり見ない赤いドット柄のネクタイをしています。シャツの襟の角度とネクタイの結び目のバランスもとてもいい。

— 自分がどう見えるか、自分をどう見せるべきかによって服装が違ってくるといことですね。

そうです。それによって、周囲の自分に対する見方が変わり、仕事の成果をも左右することになるからです。だから姿見で自分をよく見て、今日とはどんな日か、どこでどんな人に会うか、どんな状況か、そこで自分はどのような立場でどんな仕事をしたいか、それにふさわしい格好をしているかを見て、最も自分らしく見えるように演出するのです。

— その点では、スーツのようなシンプルな服こそ、自分が出やすいかもしれませんね。

特にスーツは着る人の感性が出やすいですね。だから身だしなみの基本として服の好感度と清潔感は押さえておきたい。清潔感といっても洗濯がきちんとされているということだけではなくて、袖丈やパンツの丈をちゃんと自分の体に合わせたり、シャツのサイズ感に気をつけるということです。



## 賢いはたらき方のススメ ㊦

ワイシャツはスーツから見れば本来は下着ですから、スーツの袖が傷まないようにシャツの袖が少し出ているのが正しい着方です。襟の後ろもシャツの襟を1cmほど出すものなんです。そうすると見た目に清潔感が出てきます。余裕があれば、ベルトや財布、靴などの革製品は色を統一するというテクニックもあります。

手軽に好感度を上げるのに役立つのがハンカチ。ダークスーツでネクタイもオーソドックスなのに、ふと取り出したハンカチがちょっと派手な柄だったりすると意外性があります。小物だから目立ちすぎることありません。ソックスやネクタイとハンカチの色を合わせるのも粋です。800円も出せば、それなりのものが手に入るし、これ見よがしの高級腕時計よりもずっとセンスよく見えて効果的です。ちらっと見せて、すぐしまうモノだから、周囲に「おしゃれ!」と映って印象も変わります。これも自己表現の一つのテクニックですね。こうやって小物から服装全体のイメージを作っていくという手もあります。

着こなしのセンスを高めるには、洞察力、観察力、想像力を磨くことが大切。自分を知り、よりよい自分になれる方法を探ることで洗練されていく。ファッションにも仕事にも、ひいては生き方にも通じることだと思います。



## 取材後記

個性的な服装でテレビなどに登場するドンさん（ご本人のリクエストなので、こう呼ばせていただいた）だが、決して不快感を与えるものではなく、完璧に自分のものになっている。「ファッションにおいて唯一無二でありたい」というご自身の思いを大切にしながら、周囲への気配りも決して怠らない。浮き沈みの激しい業界で、長く活躍する秘訣だろう。それにしても、服装だけでこんなに、いろいろなことを見抜いてしまうとは。「ちょっとシワが寄っているシャツだけど、まあ、いいか」というその気持ちの緩みが、仕事にも表れるということだ。

## プロフィール

## ドン小西

1950年三重県生まれ。(株)小西良幸デザインオフィス代表。「YOSHIYUKI KONISHI」「d.k.f」「FICCE」「FICCE UOMO」を大ヒットさせ、独特の色使い、匠な素材の合わせ方など「ドン小西」の世界観を築く。最近では各種メディアでの激辛ファッションチェックでもおなじみ。91年「毎日ファッション大賞」、98年「FEC(ファッションエディターズクラブ)デザイナー賞」等受賞多数。シドニーオリンピック「日本選手団公式服装選考委員会」委員、財団法人日本ユニフォームセンター理事、社団法人日本流行色協会理事、「クールビズ」「ウォームビズ」名称選考委員など。

